

本日の開村記念式典に札幌市中央区区長川原真人様、北海道議会議員千葉英守様はじめ、琴似屯田子孫会事務局長の永峰貴様、また関連の皆様方、そして屯田遺族の方々をお迎え致し、盛大に山鼻村開村 142 年式典を開催出来ました事感謝とお礼を申し上げます。天気も心配しましたが何とか式典が挙行出来ました事に安堵している処であります。

さて今から 144 年前の明治 7 年北海道の開拓と北方防衛のために屯田兵制度が実施され、第 1 次陣として明治 8 年 5 月、今から 143 年前、琴似村に 198 戸が入植。第一大隊第一中隊として初の屯田兵村が実現しました。第 2 陣として、今から 142 年前の翌年の明治 9 年 5 月兵屋完成を持って、一行は政府の御用船「通済丸」で小樽に上陸、徒歩で助け合いつつ山鼻村に到着したのが 5 月 29 日でした。伊達 34 戸、会津 53 戸、津軽 52 戸、庄内 9 戸、秋田 21 戸、宮城 69 戸、南部 2 戸、合計 240 戸 家族を合わせて総数 1,114 名が、札幌開拓の先達となりました。

山鼻屯田の入植の条件は士族、かつ家族帯同である事でした。東北各藩を対象に募集され、仙台、津軽、会津、秋田、庄内、南部の各藩の武士でした。応募については、北の蝦夷地での生活不安、見知らぬ寒冷地での妻子との生活等の不安があったものの、武士としての誇りと、信念と夢をもって応募に応じたものと推知する事が出来ます。

屯田兵は家族を連れて入地し、入植前にあらかじめ用意された家「兵屋」と、未開拓の土地とを割り当てられました。兵屋は一戸建てで村ごとに定まった規格で作られ、板壁の桁屋根の木造建築で、広さは畳敷きの部屋が 2 部屋、炉を据えた板の間、土間、便所からなり、流し前は板の間あるいは土間におかれていました。決して贅沢な間取りではないが、当時の一般庶民の住宅よりは良かったと言われております。もっとも、高温多湿の気候に向いた高床式の日本建築ゆえ、冬季には寒さで非常な苦痛を強いられました。

屯田兵の生活規則は大変厳しく起床と就業の時間が定められ、村を遠く離れる際には上官への申告を要したり、軍事訓練と農事のほかに、道路や水路などの開発工事、街路や特定建物の警備、災害救援に携わったりもしました。また、国内外の様々な作物を育てる試験農場の役目も兼ねていました。平時は徒歩憲

兵に編制されるものと規定されてもいました。

西南戦争が勃発した 1877 年（明治 10 年）4 月、黒田長官は屯田兵第一大隊、つまり琴似、山鼻の屯田兵全部隊に出征を命じ屯田兵は小樽港から出向し、鎮台兵一中隊と狙撃兵若干が配属され交戦を重ねました。屯田兵の下士兵卒には東北諸藩の士族出身が多かったため、戊辰戦争の敵だった鹿児島県士族を相手とするこの戦争に奮い立ったと言われております。

また日清戦争では、屯田兵を中心とした臨時第 7 師団の編制が命じられると、全兵力が出動し小樽に集結後、青森に渡り、そこから鉄道で東京に移動。充員を完了し第一軍に編入された。しかし講和交渉がはじまったため戦地に赴くことなく、復員命令を受け臨時第 7 師団は解散しました。

この様に、開拓従事の他に 2 つの戦争への動員等大変苦勞の多い屯田兵でしたが、今日の山鼻の礎になったわけであります。

一犯財団法人山鼻記念碑保存資産は、大正元年 9 月 27 日に有志により設立され、毎年 5 月 29 日を「山鼻屯田兵移住の日」と定め、開設記念碑前に祭壇を設け厳粛な記念式典を執行しており、今日の式典の日と違いますが、その流れが今日まで脈々と引き継がれており、今年で 142 年目となりました。

お蔭さまで今回の開村記念式典も大勢のご来賓、ご遺族の方々にご参列頂き挙行する事が出来ました事に感謝とお礼を申し上げます。

これからも先達に感謝して開村記念式典を続けて参る所存ですので宜しく願います。

また財団に関わる役員も三代目、四代目が中心となり運営しておりますが、開拓当時の事が年々希薄になりつつありますので、財団の使命としまして、前理事長の時に山鼻の歴史をしっかりと後世に伝える事とし、昨年もご紹介致しましたが今から 62 年前に発刊しました「山鼻創基 81 周年記念誌」の復刻版の作成致しました。

開村当時の書物は色々出ておりますが、この記念誌には事細かく書かれており大変貴重な資料となっております。財団事務局にて販売しておりますので、お申込み下されば幸いです。またホームページも作成しておりますので、一度ご覧頂き、ご意見ご要望をお寄せ頂き充実したものとして行く所存です。

本日は長時間に亘り開村式典にご参列賜り有難うございました。  
これを持ちまして、主催者代表のご挨拶とさせていただきます。